

2022.10
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とよ や 富 薬

10号

第44巻
No.399



ミシマサイコ *Bupleurum falcatum* L. (セリ科 *Umbelliferae*)

生薬 サイコ（柴胡） 秋から冬にかけて掘り取り、茎を切り取り水洗後陽乾する。半乾きの時細根を手で揉み落とし形を整え、更に乾燥する。

成分 サポニン配糖体 : saikosaponin a, b, c, d、脂肪油 : stearic acid, oleic acid, linolic acid 等、糖類 : adonitol、ステロール類 : *a*-spinasterol, stigmasterol 等。

効能 解熱、鎮痛、解毒、鎮静作用があり、精神神経用薬、消炎排膿薬、痔疾用薬、保健強壯薬とみなされる漢方処方に配合される。乙字湯、柴胡桂枝湯、十味敗毒湯、小柴胡湯、加味逍遙散、大柴胡湯、補中益気湯等。



生薬 サイコ（柴胡）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



ミシマサイコは福島県以南、四国、九州の日当たりのよい草原を好んで生育する多年草で、江戸時代東海道三島宿で野生採取品が集荷されたことから植物名として名付けられたと伝えられています。薬用植物として重要であったため乱獲され現在では絶滅危惧種Ⅱ類に指定されています。根茎は太く短く、根は肥厚し細長い円錐形で淡褐色、折れやすく、特異なおいがあります。茎は直立して高さ40-90cmになり、上方で分枝します。葉は互生、広線状披針形から線形、茎生葉は長さ4-10cm、幅0.6-2cm、全縁でほぼ平行に走る数本の脈があります。秋に複散形花序を頂生または腋生し、黄色の小花を多数咲かせます。秋に楕円形で3mmほどの分果を付けます。国内での栽培による供給率は2%ほどで、ほとんどは中国産に頼っています。中国産のサイコは主にマンシュウミシマサイコ (*B. chinense*) とホソバミシマサイコ (*B. scorzoneraefolium*) の2種で、外観はミシマサイコとほとんど区別が付きませんが、前者を北柴胡と言い、葉の長さは5-12cm、幅0.5-1.6cm。後者を南柴胡と呼び、葉の長さは7-15cm、幅3-6mmとわずかな差があるだけです。その差はミシマサイコの変異内と同等と言ってもよく、分類学上はミシマサイコまたはその変種とし、生薬柴胡として用いられています。

『神農本草経』(2C-3C)には「此胡」の名で「一名地熏、味は苦、平。川谷に生ず。心腹を治し、腸胃中結気、飲食、積聚、寒熱邪気を去る。陳きを推して新しきを致す。久しく服すれば、身を軽くし、目を明らかにし、精を益す」とあり、かなり古い時代から用いられていたようです。日本においては『出雲風土記』(733)の「凡て、諸の山に在る所の草木」に「柴胡」とあり、薬として用いられていたかは分かりませんが、自生種として認識はされていたようです。その名は『本草和名』(918)に「和名、乃世利、一名波末阿加奈」と、『延喜式』(927)の「典薬寮・諸国進年料雑薬」に「尾張十二斤、美濃十斤、丹波十二斤、播磨十斤、備前十斤、安芸六斤」の貢進があったと記録されています。

本格的に用いられたのは江戸中期で、古方派を代表する医師吉益東洞(1702-1773)が、『傷寒論』(3C)や『金匱要略』(3C)の古方処方、柴胡桂枝湯、小柴胡湯、大柴胡湯、柴胡加竜骨牡蛎湯、柴胡桂枝乾姜湯、四逆散などを使った頃からと言われています。『本草綱目啓蒙』(1803)には詳細な説明がなされています。「鎌倉柴胡、眞なり。即ち集解に竹葉韭葉と云うもの是なり。春未だ臺立ざる時、地に叢生する。葉は細長し。これを韭葉とし、臺たちて後は葉短し。これを竹葉とす。二物あるに非ずと『炮炙全書』(1702)に云えり。然れども今国によりて潤き葉の者一種あり。是竹葉柴胡なり。其尋常の者は韭葉柴胡なり。今は鎌倉より柴胡出でざれどもその鎌倉より出せし故舊に仍て今も鎌倉柴胡と称す。今薬肆に鎌倉柴胡と称するものの偽雜多し。用ゆるに堪えず。ミシマ柴胡と呼ぶもの佳なり。柴胡は京師四辺に産せず。勢州(伊勢)、紀州、中国、四国、九州などの余諸州に生ず。葉は麦門冬(*Liriope muscari*)の葉に似て、短くうすく豎條多し。又梢潤くして箬竹葉に似たる者あり。皆茎に紫條あり。秋に至りて長さ二三尺葉互生す。形漸く短小になり。葉間ごとに枝叉を分かち、小花を開く。攢簇すること芹の花の如く黄色にして茴香花の形の如し。実も茴香に似て小し。此の実をまきて生じ易し」と、この頃には鎌倉では採取されなくなったことや初めてミシマサイコの名が登場します。つづいて「三島柴胡と称するものは東国より出す。此れには単蘆なるもの多し。薬用に入れるべし」と、恐らく東海道三島宿周辺で採取、集荷された柴胡を薬用として用いたことを記しています。(村上守一 記)

本格的に用いられたのは江戸中期で、古方派を代表する医師吉益東洞(1702-1773)が、『傷寒論』(3C)や『金匱要略』(3C)の古方処方、柴胡桂枝湯、小柴胡湯、大柴胡湯、柴胡加竜骨牡蛎湯、柴胡桂枝乾姜湯、四逆散などを使った頃からと言われています。『本草綱目啓蒙』(1803)には詳細な説明がなされています。「鎌倉柴胡、眞なり。即ち集解に竹葉韭葉と云うもの是なり。春未だ臺立ざる時、地に叢生する。葉は細長し。これを韭葉とし、臺たちて後は葉短し。これを竹葉とす。二物あるに非ずと『炮炙全書』(1702)に云えり。然れども今国によりて潤き葉の者一種あり。是竹葉柴胡なり。其尋常の者は韭葉柴胡なり。今は鎌倉より柴胡出でざれどもその鎌倉より出せし故舊に仍て今も鎌倉柴胡と称す。今薬肆に鎌倉柴胡と称するものの偽雜多し。用ゆるに堪えず。ミシマ柴胡と呼ぶもの佳なり。柴胡は京師四辺に産せず。勢州(伊勢)、紀州、中国、四国、九州などの余諸州に生ず。葉は麦門冬(*Liriope muscari*)の葉に似て、短くうすく豎條多し。又梢潤くして箬竹葉に似たる者あり。皆茎に紫條あり。秋に至りて長さ二三尺葉互生す。形漸く短小になり。葉間ごとに枝叉を分かち、小花を開く。攢簇すること芹の花の如く黄色にして茴香花の形の如し。実も茴香に似て小し。此の実をまきて生じ易し」と、この頃には鎌倉では採取されなくなったことや初めてミシマサイコの名が登場します。つづいて「三島柴胡と称するものは東国より出す。此れには単蘆なるもの多し。薬用に入れるべし」と、恐らく東海道三島宿周辺で採取、集荷された柴胡を薬用として用いたことを記しています。(村上守一 記)